多賀城市文化財調査報告書第53集

西　沢　遺　跡

―第６次調査報告書―

平成11年３月

多賀城市教育委員会

西　沢　遺　跡

―第６次調査報告書―

平成11年３月

多賀城市教育委員会

多賀城市埋蔵文化財文化財調査報告書第53集　正誤表

項目	頁	場所	誤	正
調査に至る経緯と経過	2	18行目	Y＝12,491	Y＝14,291

序　　文

多賀城市には、国の特別史跡に指定されている多賀城跡や多賀城廃寺をはじめ、数多くの埋蔵文化財が所在しております。その総面積は実に市の４分の１にも及び、本市の歴史が古代より連綿と引き継がれてきたことを物語るものであります。

今回調査を行いました西沢遺跡は、特別史跡多賀城跡の東側に位置し、過去の調査でも貴重な遺構・遺物が数多く発見されている遺跡であります。なかでも奈良・平安時代に関しましては、多賀城との位置関係から、特に注目される遺跡の一つと確信しております。

さて、今次調査は国庫補助を受けて行った確認調査であり、昨年度に引き続き２年目となります。本遺跡でのこのような確認調査は今後数年間継続する予定であることから、多賀城東側一帯の様相が大いに解明されるものと期待しております。

最後になりましたが、発掘調査や報告書作成に際し、多大なる御指導と御協力を頂いた方々に対し厚く御礼申し上げます。

平成11年３月

多賀城市教育委員会

教育長　櫻井　茂男

例　　言

1．本書は平成10年度の国庫補助事業として実施した西沢遺跡第６次調査の成果をまとめたものである。
2．遺構の名称は第１次調査からの連番号である。
3．平面図における座標値は国土座標「平面直角座標系Ｘ」を用いて設定した。
4．挿図中の高さは標高値を示している。
5．土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1991）を使用した。
6．本書の作成に際し、関根達人氏（東北大学埋蔵文化財調査センター）のご教示を頂いた。
7．本書の執筆・編集は当センター職員の協力を得て、武田健市・車田　敦が行った。また、遺物の整理、図版の作成に際し、整理員の熊谷純子、浦風志恵子、鹿野智子、村上和恵の協力を得た。
8．調査に関する諸記録および出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

Ⅰ．遺跡の地理的・歴史的環境 …… 1
Ⅱ．調査に至る経緯と経過 …… 2
Ⅲ．調査成果 …… 3
　(1)　層　　序 …… 3
　(2)　発見した遺構と遺物 …… 3
　(3)　遺構外出土の遺物 …… 12
Ⅳ．遺構の年代 …… 13
Ⅴ．まとめ …… 13

調　査　要　項

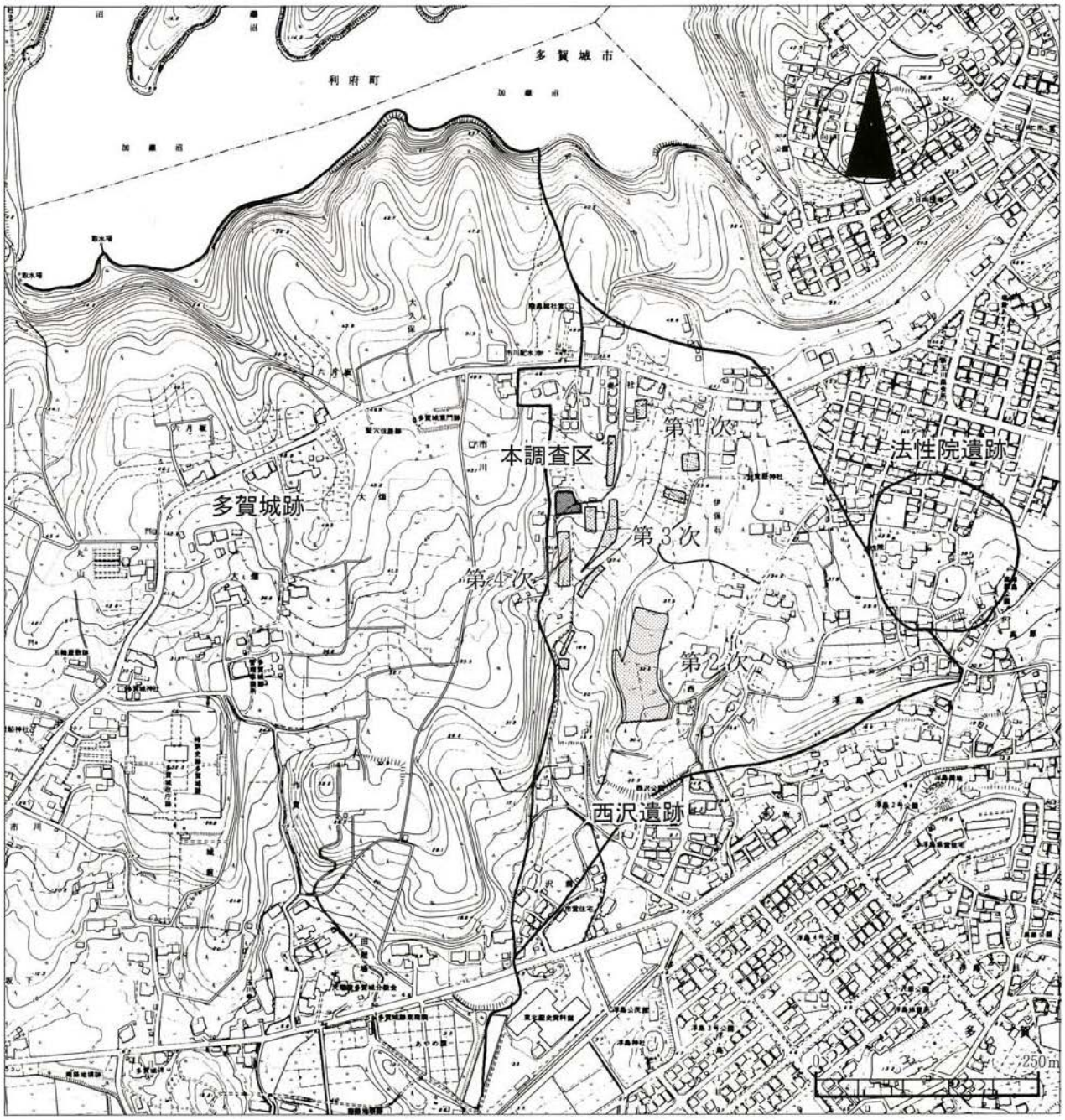
1．遺　跡　名　　西沢遺跡（宮城県遺跡登録番号　18017）
2．所　在　地　　多賀城市市川字伊保石
3．調査面積　　約400㎡
4．調査期間　　平成10年７月９日～９月９日
5．調査主体　　多賀城市教育委員会　　教育長　櫻井茂男
6．調査担当　　多賀城市埋蔵文化財調査センター　　所　長　長田　幹
7．調　査　員　　武田健市、車田　敦
8．調査協力者　　佐藤丑之助、佐藤信男
9．調査参加者　　赤間栄二郎、浅野　眞、太田恂一郎、小川光夫、小川ちよ子、長田栄太郎、小野玉乃、大道寺　勉、田中ミヨ、角田静子、橋本　務、早坂　剛、福永孝二、渡辺ひで子、渡辺ゆき子

Ⅰ．遺跡の地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

本遺跡は、多賀城市市川・浮島の両地区に所在している。地形的には松島丘陵から塩釜方面に向かって派生した低丘陵上の南西端部に位置し、東西450ｍ、南北700ｍの範囲を占めている。標高は北側の丘陵尾根付近で約46ｍ、南側の沖積地と接する付近で約６ｍであり、全体としては斜面の合間に大小の沢が入り込んだ景観を呈している。

今回の調査区は本遺跡の西端部にあたり、北側から南側に向かって傾斜する緩斜面上に位置している。調査区の現況は畑であり、標高は最も高い北側で約22ｍ、最も低い南側で約21ｍである。



第1図 調 査 区 位 置 図

(2) 歴史的環境

本遺跡の西側には、古代陸奥国府及び鎮守府が置かれた特別史跡多賀城跡が隣接している。今回の調査区から約100m西側には平安時代の外郭東辺築地があり、その内側には城内で最大の規模を有する実務官衙域が発見された大畑地区が位置している。一方、東側には奈良・平安時代を中心とする遺物散布地である法性院遺跡、高原遺跡が所在している。

本遺跡内では、これまで5度にわたる発掘調査を実施しており、古代から中世にかけての遺構・遺物を多数発見している。本調査区東側の近接地で行った第3次調査では、平安時代の鍛冶工房跡を含む14棟の竪穴住居をはじめ、中世の建物・井戸・土壙・溝などを発見している。また、東側の沢を隔てた第2次調査区では、平安時代の掘立柱建物19棟、竪穴住居4棟のほか、計画的に配置された中世の掘立柱建物36棟などを発見した。出土した遺物には、縄文時代、奈良・平安時代、中世、近世の各時代のものがある。中でも平安時代のものでは、灰釉陶器、緑釉陶器、硯、石帯、馬具、その他鍛冶関連の遺物などが出土しており、多賀城との関連性を伺わせるものである。

Ⅱ. 調査に至る経緯と経過

今回の調査は個人住宅建築に伴うものであり、昨年度より引き続き2カ年目となる。本地区周辺では多賀城跡と関連する遺構・遺物が数多く発見されていることや、対象区の面積が広大であり現在畑として作付けを行っているという現状を考慮し、複数年計画の国庫補助事業として実施したものである。

今回は、対象地の北西部に生活用道路を挟んで2カ所の調査区を設置し、便宜上西側をA区、東側をB区とした。また、A区南東付近に実測図作成のための原点(X＝－187,990、Y＝12,491)を設置し、これを通る南北及び東西方向の軸線をそれぞれの基準線とした。以下、調査経過について記載する。

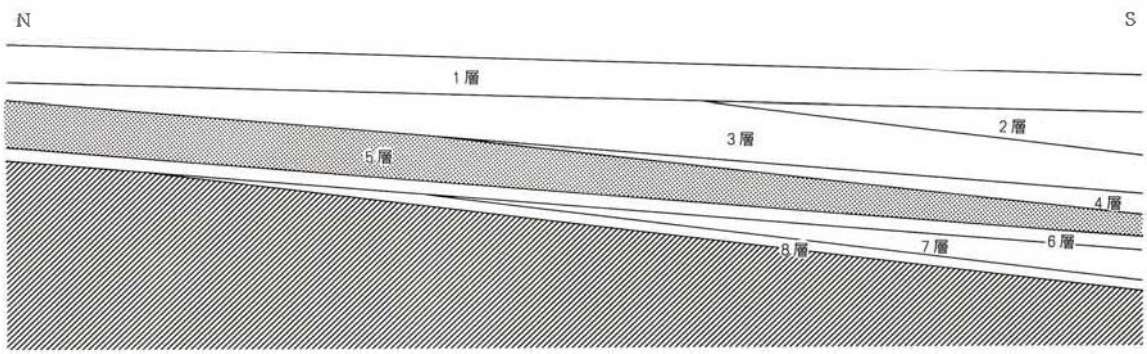
7月9日、重機による表土除去開始。7月13日より、作業員を導入し、調査器材の搬入及び遺構の検出作業を開始した。この結果、A区では表土を含め8層の堆積状況を確認し、そのうちの5層上面が遺構検出面であることが明らかとなった。一方、B区では表土下は直ちに岩盤が表れ、その上面にわずかに遺構が残存するのみであった。7月15日、遺構堆積土の掘り込みを開始し、終了したものから随時1／20の平面図を作成した。8月21日、A区の遺構検出面を部分的に掘り込み、その下層が浅い沢状の地形を呈することを確認した。9月3日、調査区の全景写真撮影。9月9日、調査器材の搬出を行い、一切の作業を終了した。

Ⅲ. 調　査　成　果

1．層　　序（第2図）

Ａ区では、北側で５層（１～３・５・７）、南側で８層（１～８）の層序を確認しており、このうち第５層上面で遺構を検出している。一方、Ｂ区では表土下が直接岩盤となっており、現代の耕作痕が所々に及んでいる。以下、Ａ区の層序について記載する。

第１層は現代の耕作土である。厚さ約15～20cmであり、調査区全体を覆っている。第２層は調査区全域で確認した近・現代の堆積土である。褐色粘質土（10YR４／４）を主体とし、明赤褐色土、灰色土が粒状に混入する。厚さは約20～30cmである。第３層は調査区中央から南側で確認した近世以降の堆積土である。黄褐色粘質土（2.5Y4／1）を主体とし、明黄褐色粘質土が粒状に混入する。厚さは約15～30cmである。第４層は調査区中央～南側の狭い範囲で確認した堆積土である。黄褐色粘質土（2.5Y4／1）を主体とし、灰黄褐色土が斑状及び小ブロック状に多く混入する。厚さは約10cmである。第５～８層は調査区中央部を北から南側に向かって傾斜する浅い沢に堆積した層である。幅は北側で約６ｍ、南側で13ｍ以上あり、中央部と南壁の最下層の比高差は約80cmである。第５層はにぶい黄褐色粘質土（10YR5／3）を主体とし、黒褐色粘質土・黄褐色粘質土が斑状に若干混入する。厚さは10～35cmである。赤焼き土器が出土していることから、10世紀以降に堆積したものと考えられる。第６層は暗褐色砂質土（7.5YR3／3）を主体とし、マンガン、明黄褐色砂岩が粒状に多く混入する。厚さは５～15cmである。第７層はにぶい黄色粘質土（2.5Y6／3）を主体とし、マンガンが粒状に若干混入する。厚さは10～20cmである。第８層は黒褐色粘質土（10YR3／3）を主体とし明黄褐色砂岩が粒状に混入する。厚さは20cm以上である。



第２図　層序模式図

2．発見した遺構と遺物

Ａ区では、土壙５基、溝９条、柱穴などを発見した。これらの多くは、第５層上面で検出したものがほとんどである。Ｂ区では、岩盤上から竪穴住居１棟、土壙３基、溝１条、柱穴を発見した。以下、地区別に主な遺構の説明を加える。

Ａ　区

(1)　古代の遺構

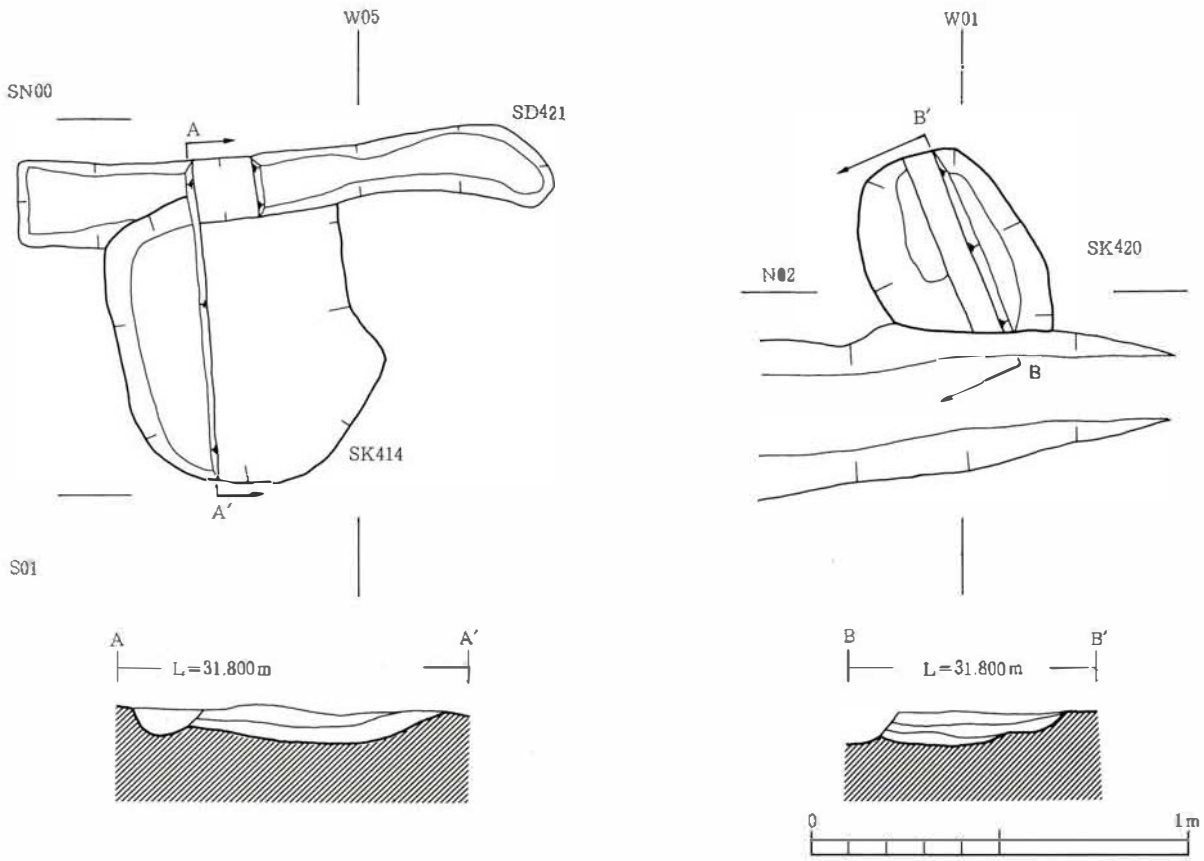
SK414（第３・５図）

調査区中央部の第５層上面で発見した鍛冶炉である。SD421と重複し、それよりも古い。平面形は南北にやや長い不整形であり、規模は長径約75cm、短径約65cm、深さ約10cmである。壁面及び底面が赤変硬化しており、埋土中には粒状滓、鍛造剥片が多く混入している。

遺物は、ロクロ調整の土師器杯、須恵器杯・甕が出土している。

SK420（第３・５図）

調査区中央部の第５層上面で発見した鍛冶炉である。SD412と重複し、それよりも古い。平面形は南北に長い楕円形であり、規模は長径約55cm、短径約45cm、深さ約10cmである。壁面及び底面が赤変硬化しており、埋土には粒状滓、鍛造剥片が多く混入している。

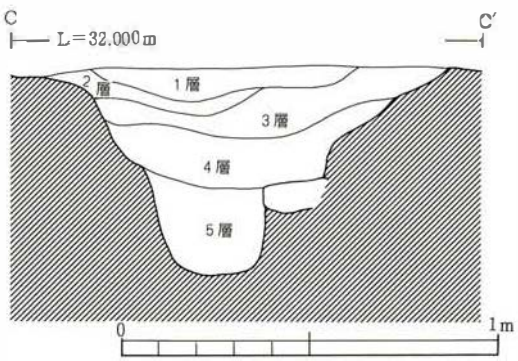


第３図　SK414・420　平面図・断面図

SK413（第４・５図）

調査区北側の第５層上面で発見した土壙である。平面形は楕円形であり、規模は長径約1.2m、短径約1.1m、深さ約50cmである。壁は底面より中央付近までは垂直であるが、それより上は緩やかに立ち上がる。埋土は５層に細分することができ、いずれも黒褐色の粘土層である。

遺物は、ロクロ調整の土師器杯・甕、須恵器甕、赤焼き土器杯が出土している。



第４図　SK413　断面図

第6図　A 区 中 央 部 断 面

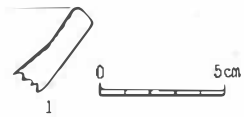
第5図　遺 構 全 体 図

(2) 中世の遺構

SD419（第５図）

調査区南西部の第５層上面で発見した南北方向の溝であり、蛇行しながら調査区外へと延びている。SD416・424と重複し、それらよりも新しい。規模は長さ10ｍ以上、上幅20～80cm、下幅10～60cm、深さ20～40cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がるところと、緩やかなところがあり一様ではない。底面は北側から南側に向かって傾斜しており、比高差は約１ｍである。埋土は南壁付近では３層に細分することができる。いずれも粘性の弱い黒褐色土を主体としており、炭化物や黄褐色土が斑状に混入している。

遺物は、無釉陶器甕・擂鉢が出土している（第７図）。



番号	種　類	層位	口径	底径	器高	特徴	登録番号
1	無釉陶器甕・擂鉢	2層				在地産	R－12

第７図　SD419　出土遺物

SK422（第５図）

調査区東側の地山上面で発見した土壙である。平面形は楕円形と推定され、規模は径２ｍ以上、深さは約50cmである。壁は中央付近で段を形成するものの、概ね緩やかに立ちあがる。埋土は黒褐色粘質土の１層のみである。

遺物は、無釉陶器甕が出土している。

(3) 近世の遺構

SD411（第５・８図）

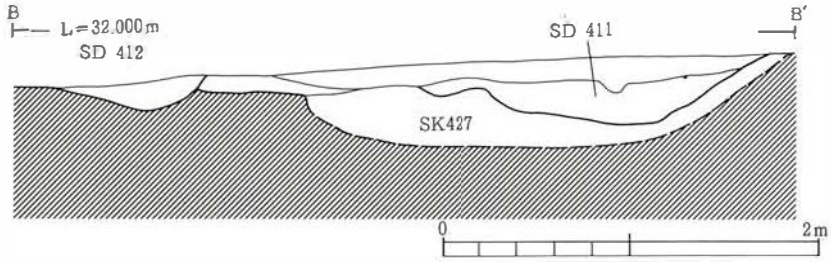
第５層上面で発見した東西方向の溝である。調査区中央部を横断しており、東側でSD425とSD426に分かれる。SD415、SK410・427と重複し、SK410よりも古く、SD415、SK427よりも新しい。規模は長さ13ｍ以上、上幅１～1.5ｍ、下幅60～100cm、深さ20～26cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸はほとんど認められない。底面は中央付近がもっとも浅く、東西両側に向かって緩やかに傾斜している。埋土は黒褐色粘土を主体とし、明黄褐色土が粒状に混入する。

遺物は磁器染付碗・皿、磁器仏飯具、陶器碗・鉢、かわらけ灯明皿、煙管、古銭、漆器碗が出土している（第９図）。

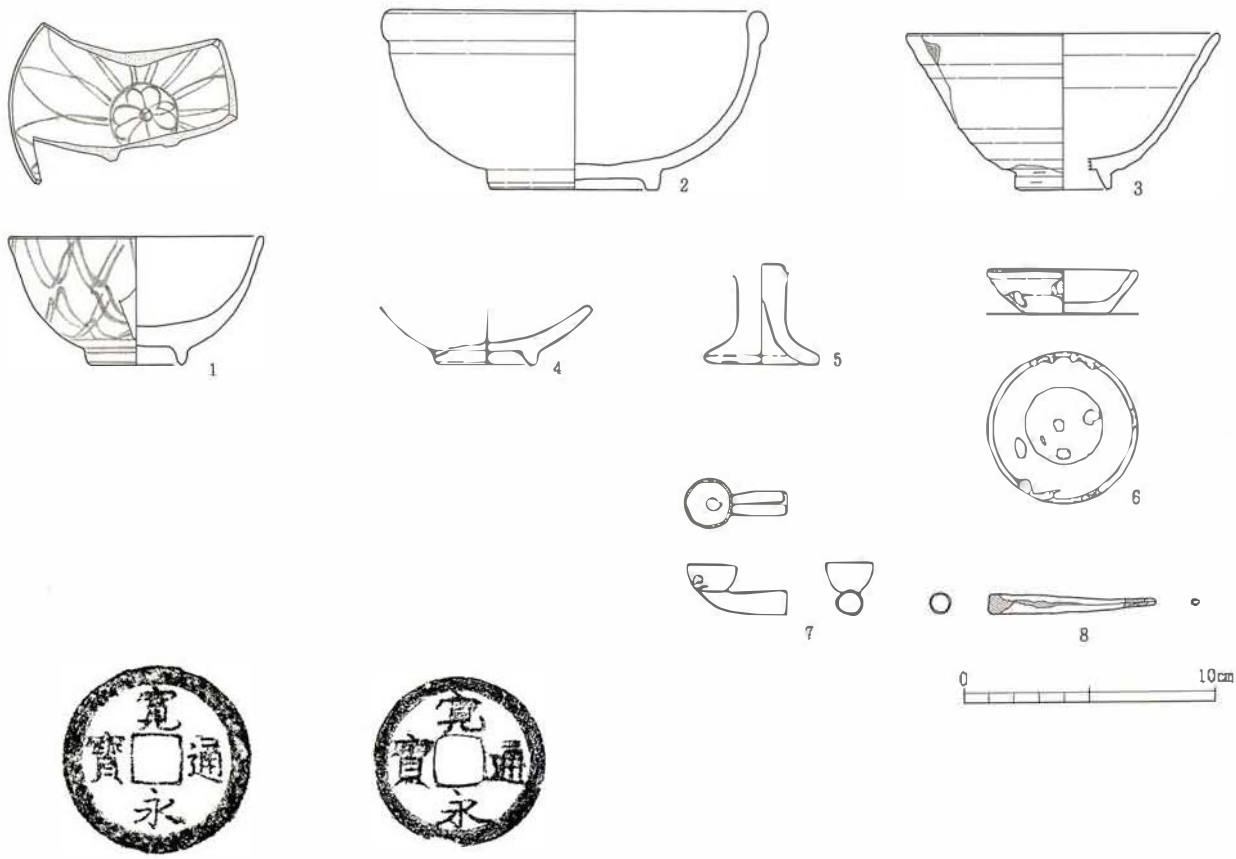
SD412（第５・８図）

調査区中央部の第5層上面で発見した東西方向の溝である。SK410・SK420と重複し、前者よりも古く、後者よりも新しい。規模は長さ6.3ｍ以上、上幅50～60cm、下幅25～30cm、深さ12～14cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸は認められない。底面は西側から東側に向かって緩やかに傾斜している。埋土は黒褐色粘土を主体とし、明黄褐色土が粒状に混入する。

遺物は、陶器碗の体部破片が出土している。



第8図　SD411・412　断面図



（古銭：実寸）

番号	種類	層位	口径	底径	器高	特徴	登録番号
1	磁器染付・碗	1層	10.2	3.6	5.1	肥前系、18世紀	R－1
2	磁器・鉢	1層	14.7	6.7	7.2	全面鉄釉、底部回転削り、産地不明	R－2
3	磁器・碗	2層	12.4	4	6.2	鉄釉流し掛け、大堀相馬系、19世紀	R－3
4	磁器・碗	2層		3.8		大堀相馬系、18世紀	R－4
5	磁器・仏飯具	1層		4.3		瀬戸系、19世紀	R－15
6	かわらけ・灯明皿	2層	5.9	3.3	1.8	口縁部に油煙付着	R－7
7	煙管・雁首	1層	火皿径1.9	首部長3.6	羅字接合部径1.1		R－1
8	煙管・吸口	1層	長さ 6.6	吸口径0.3	羅字接合部径0.8		R－2
9	新寛永銭	2層				無背銭	R－7
10	新寛永銭	2層				無背銭	R－8

第9図　SD411　出土遺物

SD415（第５図）

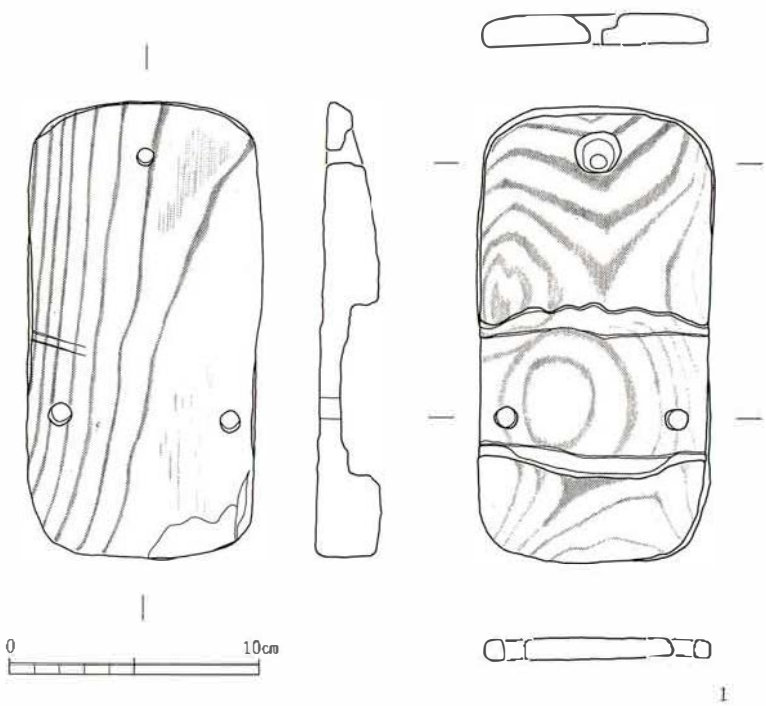
調査区東側で発見した南北から東西に屈曲する溝である。SD411と重複し、それよりも古い。規模は長さ3.9m以上、幅45～110cm、深さ10～17cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面に凹凸は認められない。底面は南北から東西に向かって緩やかに傾斜している。埋土は２層に細分することができる。１・２層共に黒褐色土であるが、１層に比べて２層の粘性が非常に強い。

遺物はロクロ調整の土師器杯・甕、須恵器甕の小破片が出土している。

SK410（第５図）

調査区北西部の第５層上面で検出した土壙である。SD411・412と重複し、それらよりも新しい。平面形は方形であり、規模は南北2.8m以上、東西5.2m以上、深さ15～21cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はおおむね平坦である。埋土は黒褐色粘土の単層である。

遺物は磁器染付碗・皿、木製の下駄が出土している（第10図）。



番号	種類	層位	長さ	幅	厚さ	特徴	登録番号
1	木製品・下駄	1層	18.3	9.3	2.2		R－1

第10図　SK410　出土遺物

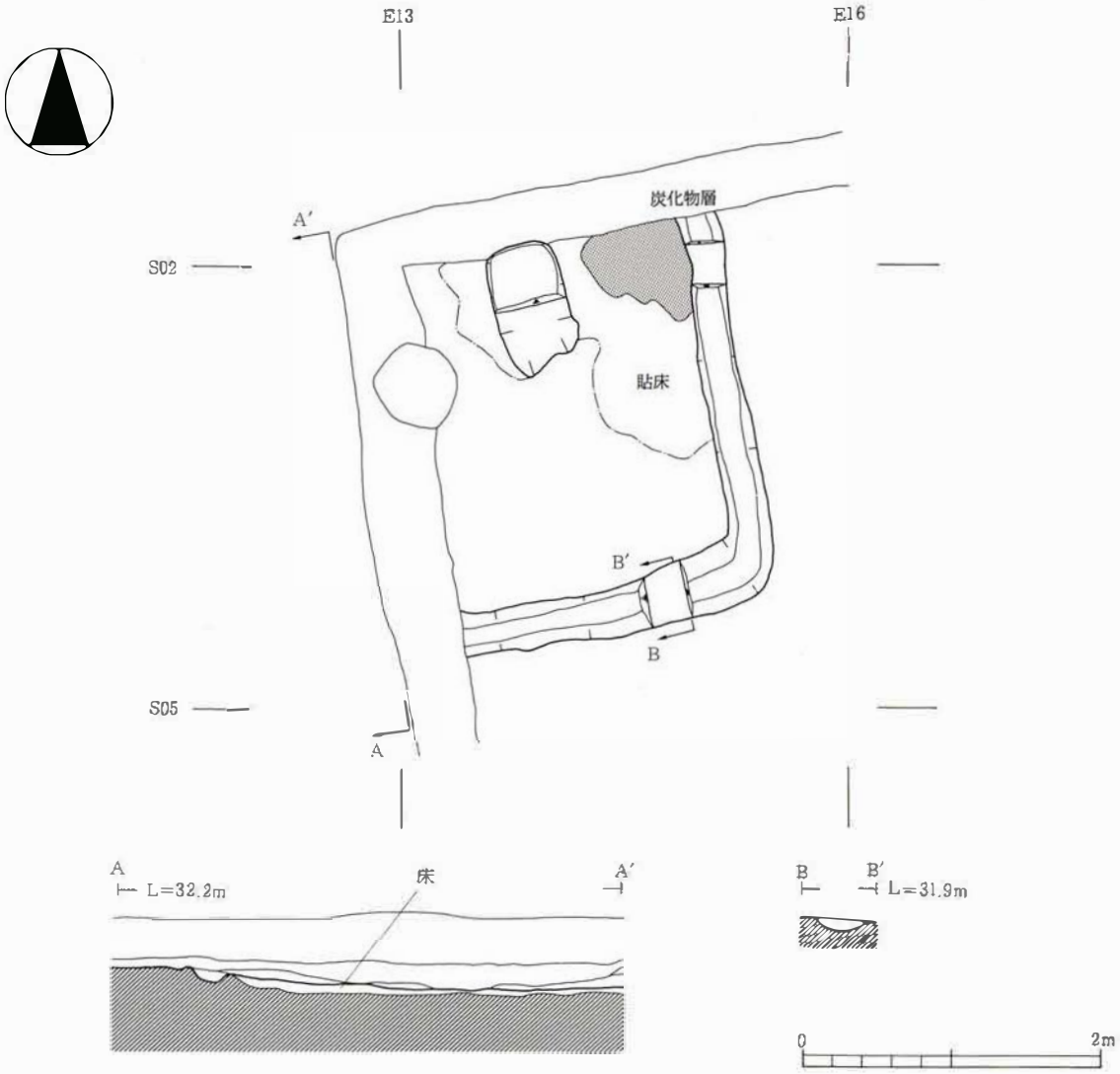
B　区

(1)　古代の遺構

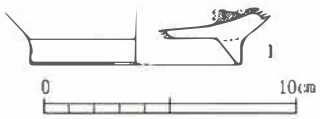
SI418（第５・11図）

調査区北西隅で発見した竪穴住居である。上面の大部分が削平されており、周溝と床面が残存するのみである。平面形は方形であり、東辺2.6m以上、南辺2.1m以上である。周溝は、上幅25～45cm、下幅14～16cm、深さ６～12cmである。床は部分的に残存しており、褐灰色粘質土を貼床している。なお、東側の壁際で65×75cmほどの焼け面を確認しており、カマドが敷設されていたものと考えられる。

遺物は、周溝より土師器と須恵器甕の小破片が各1点、焼け面より土師器高台付杯の底部が１点出土している（第12図）。



第11図　SI418　平面図・断面図



番号	種　類	層位	口径	底径	器高	特　　徴	登録番号
1	土師器・高台付杯	焼面		8.2		内面へラミガキ→黒色処理	R−16

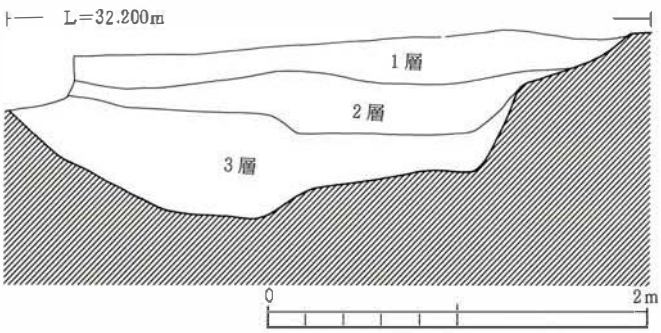
第12図　SI418　出土遺物

(2) 近世の遺構

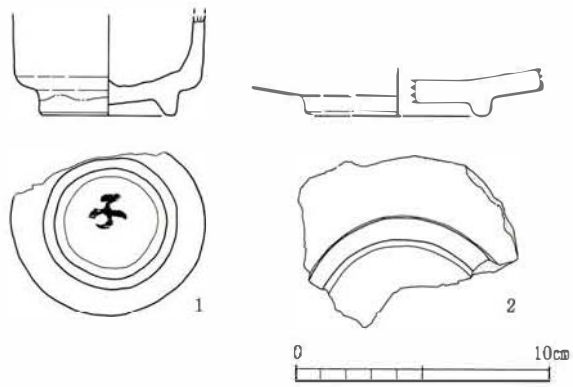
SK417（第5・13図）

調査区南側で発見した土壙である。平面形は不整形であり、規模は長径約3.4m、短径約3m、深さ約1mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。埋土は褐色土を主体としており、3層には大小の石が多量に混入している。

遺物は染付磁器碗、陶器灰吹・皿が出土している（第14図）。



第13図　SK417　断面図



番号	種類		口径	底径	器高	特　　徴	登録番号
1	陶器・灰吹	2層		5.4		底部に「子(?)」の墨書、小野相馬系、18世紀	R−17
2	陶器・皿	2層		7.4		堤系、なまこ釉、19世紀	R−18

第14図　SK417　出土遺物

SK428（第5図）

調査区西側で発見した土壙である。平面形は円形であり、規模は直径約60cm、深さ約20cmである。壁は垂直に立ち上がり、底面は概ね平坦である。底面には薄い木製の板が敷かれていた。埋土は褐灰色粘土であり、籾殻が多量に混入していた。

遺物は新寛永銭が出土している（第15図）。

1

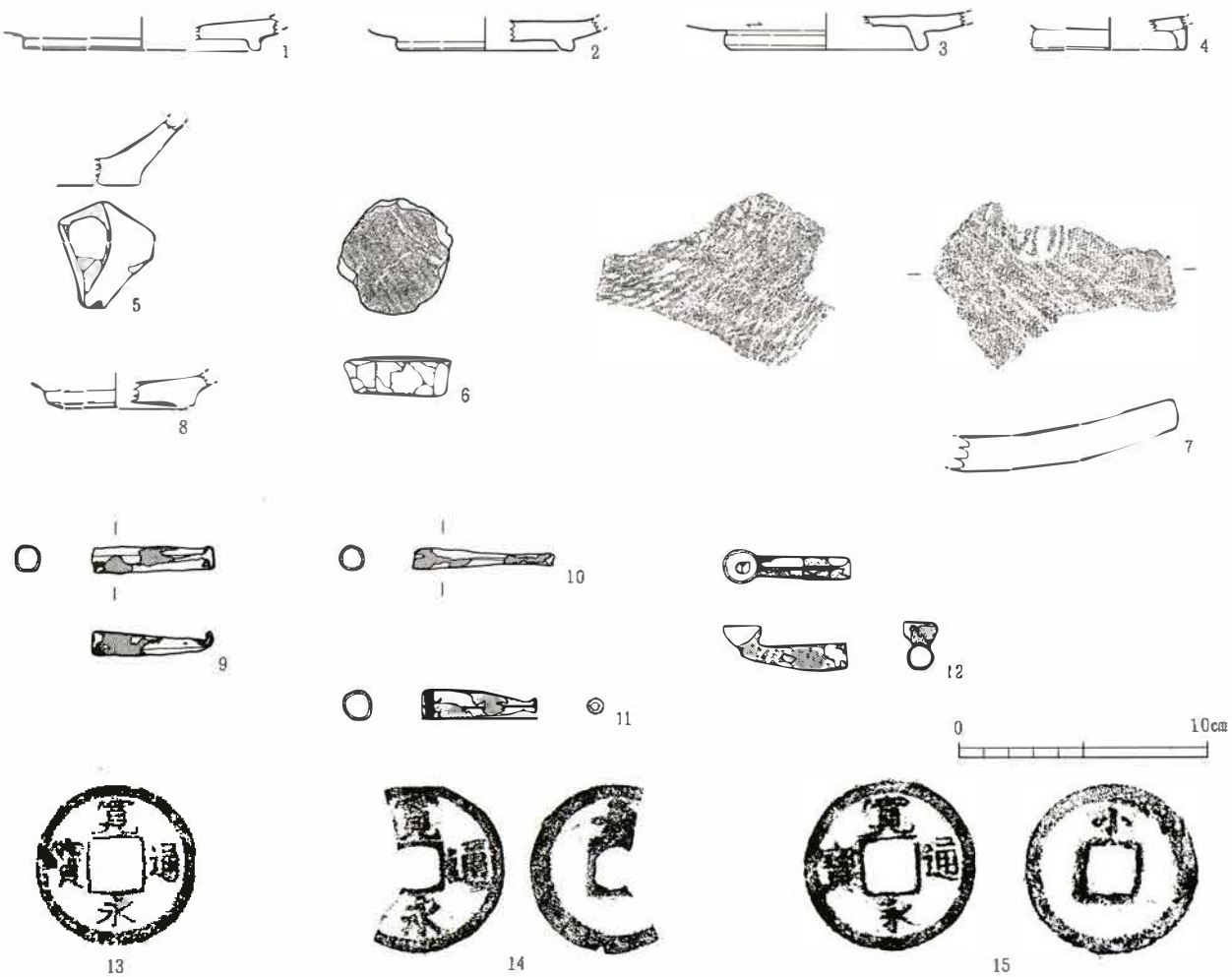
（実寸）

番号	種　類		口径	底径	器高	特　　徴	登録番号
1	新寛永銭	1層				無背銭	R−13

第15図　SK428　出土遺物

3．遺構外出土の遺物（第16図）

古代の遺物では土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦、灰釉陶器、緑釉陶器、青磁がある。1～3は灰釉陶器の底部破片である。1・2は黒笹14窯式の碗（皿）であり、3は黒笹90号窯式の皿である。4は緑釉陶器碗（皿）の底部である。5は越州窯系青磁碗の底部である。幅が広く背の低い蛇の目高台のものであり、全面に釉が施されている。7は凹面に「物」の刻印のある瓦である。



（古銭：実寸）

番号	種類	層位	口径	底径	器高	特徴	登録番号
1	灰釉陶器・碗（皿）	第2層		9.2		内面全体に釉、黒笹14号窯	R－11
2	灰釉陶器・碗（皿）	第2層		7.2		内面全体に釉、黒笹14号窯	R－10
3	灰釉陶器・皿	第5層		4.8		高台接地面無釉、黒笹90号窯	R－9
4	緑釉陶器・碗（皿）	第4層		6.2			R－8
5	青磁・碗	第3層				越州窯系、大宰府1－1	R－5
6	円盤状土製品	第2層	径 4.6	厚さ 1.5			R－13
7	平瓦	第5層				凹面：糸切り→布目→ナデ、「物」の刻印 凸面：縄叩き→叩き目のつぶれ	R－14
8	白磁・碗（皿）	第3層		4.2		大宰府Ⅳ－1（Ⅱ－1）	R－6
9	煙管吸口	第2層	長さ 5.0	羅宇接合部径 1.0			R－2
10	煙管吸口	第2層	長さ 5.7	羅宇接合部径 0.9			R－3
11	煙管吸口	第2層	長さ 4.6	吸口径 0.6	羅宇接合部径 1.2		R－6
12	煙管雁首	第3層	火皿径 1.4	長さ 4.3	羅宇接合部径10.2		R－5
13	新寛永銭	第2層				無背銭	R－12
14	新寛永銭	第2層				「長」の背文	R－10
15	新寛永銭	第2層				「小」の背文	R－9

第16図　遺構外出土遺物

中世の遺物では青磁、白磁、無釉陶器がある。8は白磁碗（皿）の底部であり、削り出しの浅い幅広の高台を持つ。外面底部には施釉されていない。

近世の遺物では磁器、陶器、古銭、煙管などがある。9～12は煙管である。9～11が吸口、12が雁首である。雁首は火皿と首部の間に補強帯が巡らないものである。13～15は古銭である。いずれも新寛永銭であり、14には「長」、15には「小」の背文字が認められる。

Ⅳ. 遺構の年代

今回発見した遺構には、竪穴住居1棟、土壙7基、溝10条、柱穴、その他ピットがある。以下、これらの遺構の年代についてまとめてみたい。

1．古代の遺構

SI418、SK413・414・420、SD416・423・424がある。

SI418は焼け面直上からロクロ調整の土師器高台付杯が1点出土していることから、おおよそ9世紀以降のものと考えられる。SK413・414・420、SD416・423・424は10世紀以降に堆積した第5層上面で検出したものであるが、出土した遺物はすべて古代のものに限られる。このことから、これらの遺構に関しても古代のものと考えておきたい。

2．中世の遺構

SD419、SK422がある。

SD419からは無釉陶器甕・擂鉢が出土している。このうち擂鉢は、口縁の形態より13～14世紀代のものと考えられる。したがって、SD419についてはそれ以降の年代が推測される。SK422からは無釉陶器甕の破片が出土していることから、おおむね中世の遺構としておきたい。

3．近世の遺構

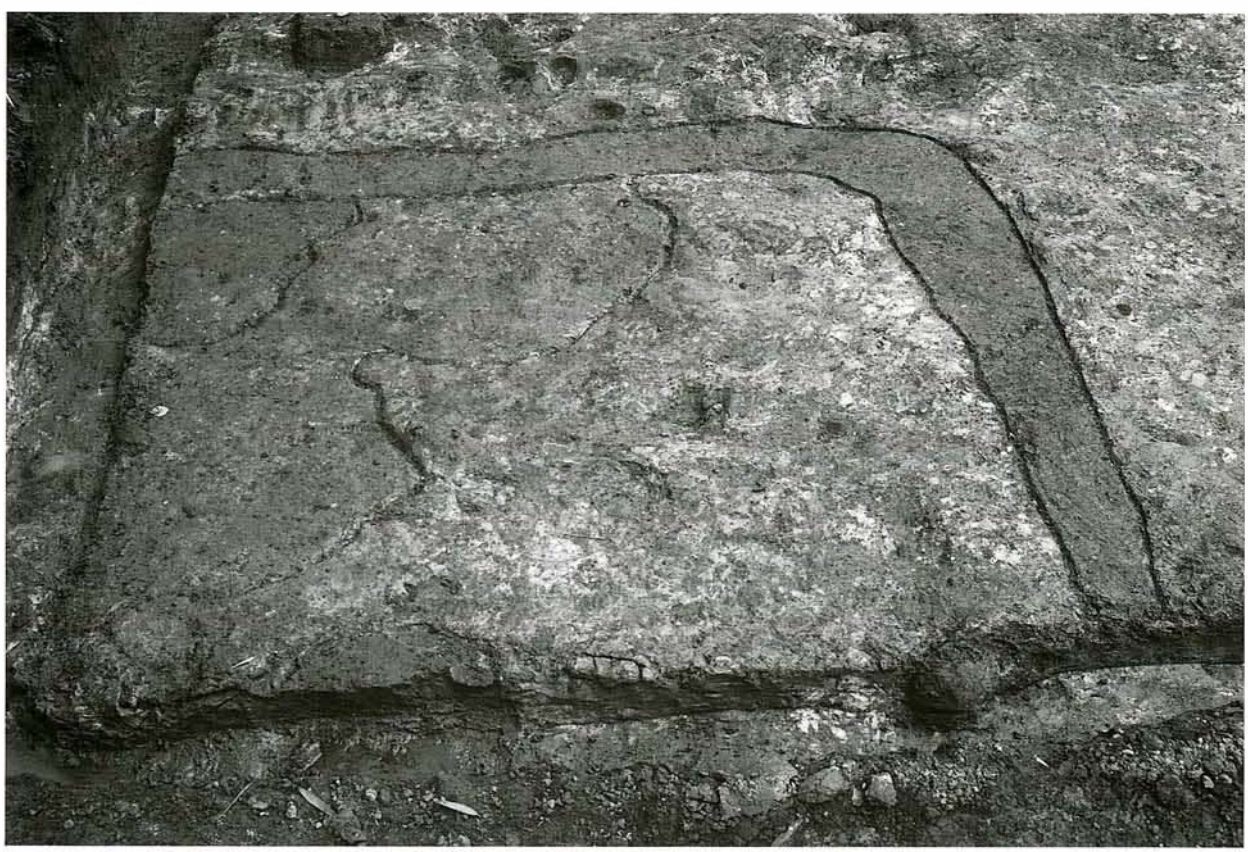
SD411・412・415、SK410・417・428がある。

このうちSK428では新寛永銭が出土していることから、17世紀末以降のものである。SD411、SK417では19世紀代の陶器が出土していることから、それ以降の年代が与えられる。SK410はSD411と重複し、それよりも新しい遺構である。したがって、19世紀以降の年代が与えられる。SD415はSD411と重複し、それよりも古い遺構である。出土遺物は古代の遺物のみであるが、埋土がSD411・412と類似していることから、近世の遺構と考えておきたい。SD412は出土遺物に近世の染付磁器の小破片が含まれることから、それ以降のものと考えられる。

Ⅴ. まとめ

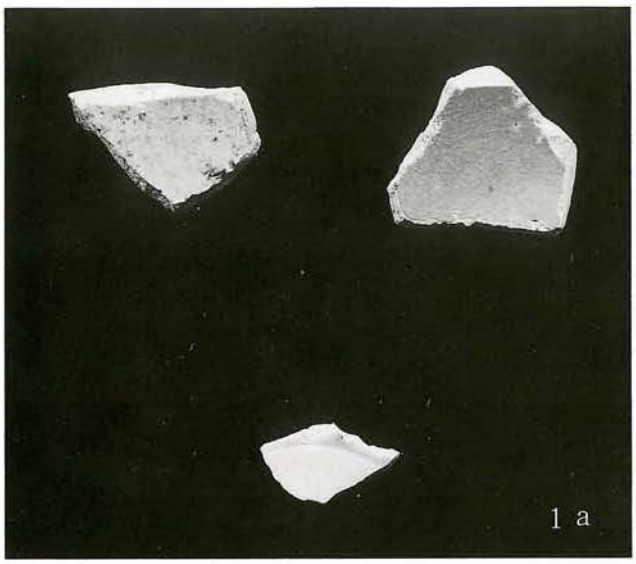
1．今回の調査では、古代～近世にかけての遺構・遺物を発見した。

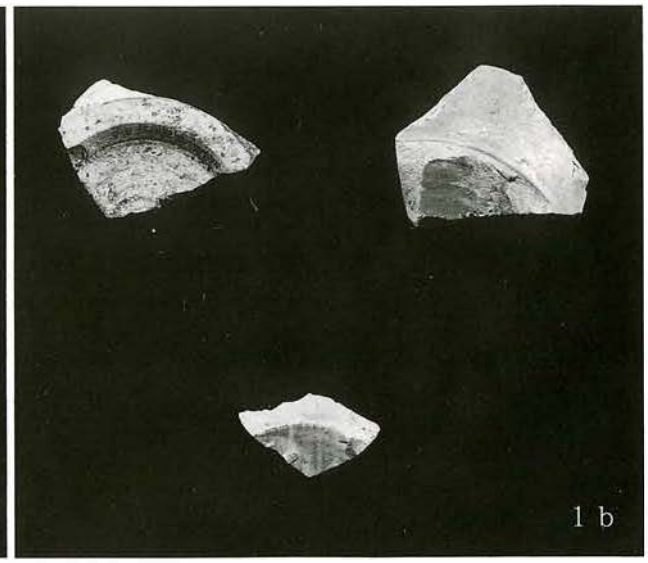
2．古代の遺構には竪穴住居1棟、鍛冶炉2基、土壙1基、溝3条がある。年代については竪穴住居が9世紀以降、その他のものが10世紀以降である。

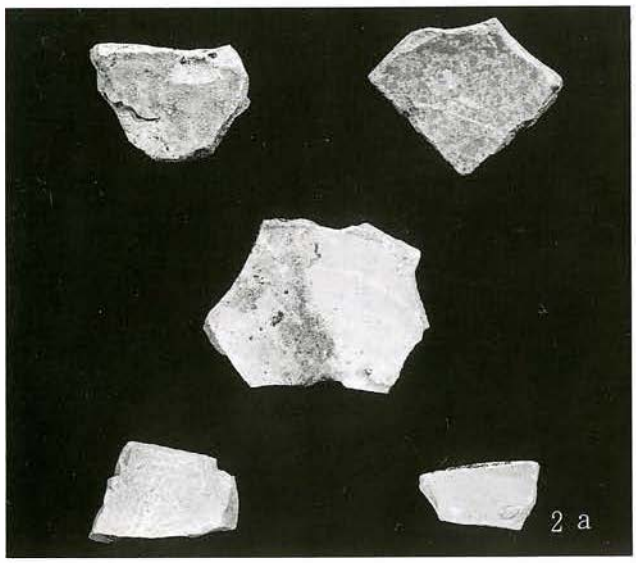


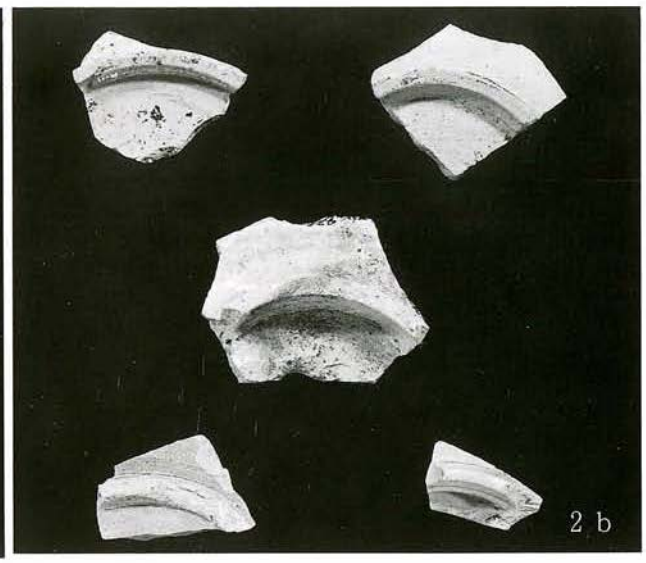
上　A区全景（北より）
下　SI418　竪穴住居（西より）

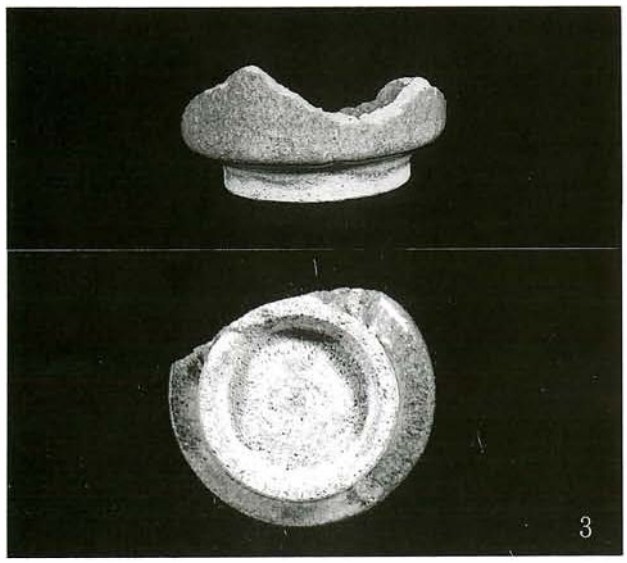
図　版　1

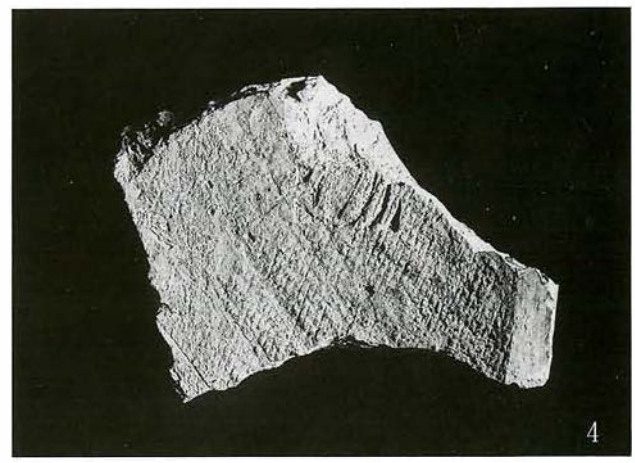












1．青磁、白磁

2．灰釉、緑釉

3．陶器・碗（小野相馬）

4．平瓦

図 版 2

報告書抄録

ふりがな	にしざわいせき
書名	西沢遺跡
副書名	第6次調査報告書
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第53集
編著者名	武田健市・車田　敦
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985−0873　宮城県多賀城市中央二丁目27−1
発行年月日	西暦1999年3月26日

所収遺跡（よりがな）	所在地（よりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
西沢遺跡（にしざわいせき）（第6次）	多賀城市（たがじょうし）市川字（いちかわあざ）伊保石地内（いぼいしちない）	18	017	38度18分11秒	141度59分49秒	19970714～19970912	400㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西沢遺跡（第6次）	集落	平安	竪穴住居、鍛冶炉溝跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、緑釉陶器、青磁、瓦	
		中世	溝跡、土壙	青磁、白磁、無釉陶器	
		近世	溝跡、土壙	磁器、陶器、古銭煙管、木製下駄、漆器	

多賀城市文化財調査報告書第53集

西　沢　遺　跡

—第6次調査報告書—

平成11年3月26日　発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話　(022) 368−0134

発行　多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話　(022) 368−1141

印刷　有限会社　工陽社
塩釜市尾島町8−7
電話　(022) 365−1151